長崎大学教育学部紀要－教育科学－　第78号　67～72　（2014年3月）

対人ストレスコーピングの効果における個人差
― 対人場面における曖昧さへの非寛容に着目して ―

谷　口　弘　一*

Individual Differences in the Effects of Interpersonal Stress Coping: Focusing on Interpersonal Intolerance of Ambiguity

Hirokazu TANIGUCHI

Abstract

This study examined individual differences in the effects of interpersonal stress coping on mental health among adolescents. The respondents were 173 college students (76 males, 93 females) with a mean age of 19.7 years. They answered the Interpersonal Stress-Coping Inventory (consisting of positive relationship-oriented coping, negative relationship-oriented coping, and postponed-solution coping), measures of mental health (depression and loneliness), and an individual difference measure of interpersonal intolerance of ambiguity. Positive relationship-oriented coping was significantly related to loneliness only among people with high levels of interpersonal intolerance of ambiguity. Results also indicated that postponed-solution coping was significantly correlated with loneliness only among people with low levels of interpersonal intolerance of ambiguity.

Key words: interpersonal stress coping, interpersonal intolerance of ambiguity, college students.

*長崎大学教育学部

問題と目的

対人関係に起因するストレスフルな出来事のことを対人ストレッサーといい、対人ストレッサーに対するコーピングのことを対人ストレスコーピングという（加藤, 2000, 2003）。対人ストレスコーピングは、ポジティブ関係コーピング（積極的に関係を改善し、より良い関係を築こうと努力する）、ネガティブ関係コーピング（関係を放棄・崩壊する）、解決先送りコーピング（時間が解決するのを待つ）の３つに分類される。

対人ストレスコーピングと精神的健康との関連については、ポジティブ関係コーピングが抑うつと無関連、孤独感と負の関連を、ネガティブ関係コーピングが抑うつ、孤独感と正の相関を、解決先送りコーピングが抑うつ、孤独感と負の相関をそれぞれ持つことが確認されている（加藤, 2007）。このような関連の相異を説明するモデルが、対人ストレス過程における社会的相互作用モデル（加藤, 2007）である。このモデルでは、対人ストレスコーピングが精神的健康に与える影響を第一過程と第二過程の２つに区別している。前者は、ある対人ストレスコーピングを使用することによって、そのコーピングが、実行者自身の精神的健康に「直接的」に影響を与える過程である。一方、後者は、ある対人ストレスコーピングを使用することによって、そのコーピングが、コーピングの「受け手」の感情・行動・関係に影響を与え、それらを仲介することによって、最終的には、実行者自身の精神的健康に「間接的」に影響を与える過程である。

社会的相互作用モデル（加藤, 2007）によると、ポジティブ関係コーピングは、抑うつを第一過程では増大、第二過程では減少させ、その影響力は第一過程の方が大きい。孤独感に対しては、第一過程と第二過程ともにそれを減少させ、その影響力は第二過程の方が強い。ネガティブ関係コーピングは、第一過程と第二過程ともに精神的健康状態を悪化させる。加えて、抑うつに対しては第一過程の影響力が、孤独感に対しては第二過程の影響力がそれぞれ強い。解決先送りコーピングは、第一過程と第二過程ともに精神的健康状態を良好にさせる。さらに、抑うつと孤独感いずれにおいても第一過程の方が第二過程よりも影響力が強い。

こうした知見とは別に、第一過程と第二過程の影響力の差は個人差によるものである可能性も指摘されている（谷口, 2007）。例えば、他人よりも自分自身の感情、行動などに関心が高い人では、ポジティブ関係コーピングを使用した際、第一過程の影響力の方が強くなるであろう。一方、自分自身よりも他人の感情、行動などに関心が高い人では、第二過程の影響力の方が強くなることが予測される。

谷口（2013a）は、他人の感情や行動に対する個人の興味・関心の程度を表す個人差変数として、対人志向性と共感性という２つの変数を取りあげ、対人ストレスコーピングと精神的健康との関連に対するそれら２変数の調整効果について、大学生を対象に検討を行った。その結果、ポジティブ関係コーピングと抑うつとの負の相関は、対人志向性、共感性が高い群においてのみ認められた。一方､解決先送りコーピングと抑うつとの負の相関は、対人志向性、共感性が低い群においてのみ認められた。また、谷口（2013b）は、小・中・高校生を対象にして、対人ストレスコーピングと抑うつとの関連に対する共感性の調整効果を検討した。その結果、ポジティブ関係コーピングと抑うつとの負の相関は、小・中学生の共感性が高い群においてのみ認められた。一方、解決先送りコーピングと抑うつとの

負の相関は、小学生の共感性が低い群においてのみ確認された。

これらの結果から、ポジティブ関係コーピングと抑うつとの関連は、対人志向性、共感性が高い人では第二過程の影響力が相対的に強くなり、対人志向性、共感性が低い人では第一過程と第二過程の影響力がほぼ等しくなることが示唆された。一方、解決先送りコーピングと抑うつとの関連は、社会的相互作用モデル（加藤，2007）とは異なり、第一過程が抑うつに対して低減効果、第二過程が増大効果を持ち、共感性が高い人では第一過程と第二過程の影響力がほぼ等しく、共感性が低い人では第一過程の影響力が強くなる可能性が示唆された。

本研究では、対人ストレスコーピングと精神的健康との関連に影響を与えると考えられる新たな個人差変数として、対人場面における曖昧さへの非寛容を取りあげる。対人場面における曖昧さへの非寛容とは、他者との相互作用において生じる曖昧な事態を恐れの源泉として知覚（解釈）する傾向のことである（友野・橋本，2005，2006）。他者との相互作用において曖昧な状況が生じると、そうした状況に対して非寛容な人は、寛容な人と比較して、対人不安が高くなる（友野・橋本，2005）。解決先送りコーピングの使用は、ストレスフルな出来事がすぐには解決しない曖昧な状況を継続させるため、曖昧さに耐えられない人では、解決先送りコーピングのストレス反応低減効果が弱まることが予測される。以上のことから、本研究では、対人ストレスコーピングと精神的健康（抑うつ、孤独感）との関連に対する対人場面における曖昧さへの非寛容の調整効果を検討した。

方　法

調査対象者と調査手続き

大学生 173 名（男子 76 名、女子 93 名）が調査に参加した。平均年齢は 19.7 歳（*SD*=1.84）であった。調査は講義時間中に情報処理教室の PC 端末を利用して、ウェブ上で一斉に実施された。

調査内容

調査には、学生 ID、年齢などを質問する項目に加えて、下記の尺度が含まれていた。

対人ストレスコーピング　加藤（2000，2003）が作成した 34 項目からなる対人ストレスコーピング尺度を用いた。本尺度は、ポジティブ関係コーピング（16 項目）、ネガティブ関係コーピング（10 項目）、解決先送りコーピング（８項目）の３つの下位尺度をもつ。調査参加者は、対人関係でいやな出来事を経験した際に、どのように考え行動しているかについて、あてはまらない(1)～よくあてはまる(4)の４件法で回答した。分析には各下位尺度の合計点を用いた。得点が高いほど、各対人ストレスコーピングの使用頻度が高いことを示す。α 係数は、ポジティブ関係コーピングが .88、ネガティブ関係コーピングが .79、解決先送りコーピングが .89 であった。

抑うつ　Center for Epidemiologic Studies Depression Scale（Radloff，1977）の邦訳版（島・鹿野・北村・浅井，1985）を用いた。本尺度は 20 項目で構成されている。調査参加者は、各項目に示された精神的・身体的状態が、最近１週間の自分にどの程度当てはまるかについて、あてはまらない(1)～よくあてはまる(4)の４件法で回答した。各項目の合計点

を算出し、それを抑うつ得点とした。得点が高いほど、抑うつ傾向が高いことを示す。α係数は .90 であった。

孤独感　The Revised UCLA Loneliness Scale（Russell, Peplau, & Cutrona, 1980）の邦訳版（諸井, 1991）を用いた。本尺度は20項目で構成されている。調査参加者は、最近1週間で感じた孤独感について、決して感じない(1)～しばしば感じる(4)の4件法で回答した。各項目の合計点を算出し、それを孤独感得点とした。得点が高いほど、孤独感が高いことを示す。α係数は .88 であった。

対人場面における曖昧さへの非寛容　友野・橋本（2005）が作成した17項目からなる改訂版対人場面における曖昧さへの非寛容尺度（IIAS-R）を用いた。本尺度は、初対面の関係における曖昧さへの非寛容（6項目）、半見知りの関係における曖昧さへの非寛容（6項目）、友人関係における曖昧さへの非寛容（5項目）の3つの下位尺度をもつ。調査参加者は、各項目に示された対人場面における曖昧さへの反応に対して、自分自身がどの程度同意するかについて、全く同意しない(1)～とても強く同意する(7)の7件法で回答した。分析には全項目の合計点を用いた。得点が高いほど、対人場面における曖昧さに耐えられないことを示す。α係数は .90 であった。

結　果

全体サンプルにおける対人ストレッサーと抑うつ、孤独感の関連

全体サンプルにおける相関分析の結果を Table 1 に示す。ポジティブ関係コーピングは、孤独感と有意な負の相関（$r=-.24$, $p<.01$）があった。ネガティブ関係コーピングは、孤独感、抑うつと有意な正の相関があった（$r=.38$, $p<.01$; $r=.33$, $p<.01$）。解決先送りコーピングは、孤独感、抑うつと有意な負の相関があった（$r=-.19$, $p<.05$; $r=-.19$, $p<.05$）。ポジティブ関係コーピングは、孤独感を低下させ、ネガティブ関係コーピングは孤独感と抑うつを増加させ、解決先送りコーピングは孤独感と抑うつを低下させていた。

Table 1　全サンプルの相関分析の結果

	孤独感	抑うつ
ポジティブ関係コーピング	-.24**	-.09
ネガティブ関係コーピング	.38**	.33**
解決先送りコーピング	-.19*	-.19*

Note. N=173. * p<.05, ** p<.01

対人場面における曖昧さへの非寛容の調整効果

調査参加者を対人場面における曖昧さへの非寛容の平均点で高低の2群に分類し、各群において相関分析を行った（Table 2）。曖昧さへの非寛容の低い群では、ポジティブ関係コーピングは、孤独感、抑うつとは無相関であった。ネガティブ関係コーピングは、孤独感、抑うつと有意な正の相関があった（$r=.41$, $p<.01$; $r=.37$, $p<.01$）。解決先送り

コーピングは、孤独感と有意な負の相関（$r=-.23$, $p<.05$）、抑うつと負の相関の有意傾向があった（$r=-.21$, $p<.10$）。一方、曖昧さへの非寛容の高い群では、ポジティブ関係コーピングは、孤独感と有意な負の相関があった（$r=-.23$, $p<.05$）。ネガティブ関係コーピングは、抑うつ、孤独感と有意な正の相関があった（$r=.28$, $p<.01$; $r=.23$, $p<.05$）。解決先送りコーピングは、抑うつと負の相関の有意傾向があった（$r=-.19$, $p<.10$）。

Table 2　対人場面における曖昧さへの非寛容の調整効果

	対人場面における曖昧さへの非寛容			
	低群		高群	
	孤独感	抑うつ	孤独感	抑うつ
ポジティブ関係コーピング	-.16	-.14	-.23*	.02
ネガティブ関係コーピング	.41**	.37**	.28**	.23*
解決先送りコーピング	-.23*	-.21†	-.16	-.19†

Note. N=75（低群），N=98（高群）．† p<.10，* p<.05，** p<.01.

考　察

ポジティブ関係コーピングと孤独感との負の関連は、対人場面における曖昧さへの非寛容が高い群においてのみ認められた。加藤（2007）の社会的相互作用モデルによると、ポジティブ関係コーピングは、孤独感に対して、第一過程と第二過程ともにそれを減少させる。曖昧さに耐えられない人では、ポジティブ関係コーピングの使用による問題解決が、曖昧さの解消となることによって、第一過程あるいは第二過程の孤独感低減効果が強められたと考えられる。一方、解決先送りコーピングと孤独感との負の関連は、対人場面における曖昧さへの非寛容が低い群において認められた。解決先送りコーピングは、第一過程および第二過程ともに、孤独感を低減させる（加藤, 2007）。曖昧さに耐えられない人では、解決先送りコーピングの使用によって、問題が解決されず、曖昧な状況が続くために、第一過程あるいは第二過程の孤独感低減効果が弱められたのであろう。

本研究では、対人ストレスコーピングと抑うつとの関連に対して、対人場面における曖昧さへの非寛容の調整効果は認められなかった。一方、谷口（2013a,b）では、ポジティブ関係コーピングならびに解決先送りコーピングと抑うつとの関連について、対人志向性または共感性が調整効果を持つことが見いだされた。とりわけ、解決先送りコーピングと抑うつとの関連については、第一過程が抑うつに対して低減効果、第二過程が増大効果を持つ可能性が示唆された。谷口（2013a,b）の仮説モデルに従うと、曖昧さに耐えられない人では、第一過程の抑うつ低減効果が弱まり、相対的に、第二過程の抑うつ増大効果が強まることから、結果的に解決先送りコーピングと抑うつが正の関連を持つことが予測された。一方、加藤（2007）の社会的相互作用モデルに従うと、曖昧さに耐えられない人では、第一過程ならびに第二過程の抑うつ低減効果が弱まるため、曖昧さに耐えられる人よりも、解決先送りコーピングと抑うつとの負の相関が小さくなることが予測された。本研究の結果は、いずれの予測も支持しないものであった。解決先送りコーピングと抑うつとの関連

について、どのような説明モデルが妥当であるかについて、今後より詳細な検討が必要であろう。

引用文献

加藤　司（2000）．大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成　教育心理学研究，**48**，225-234．

加藤　司（2003）．対人ストレスコーピング尺度の因子的妥当性の検証　人文論究（関西学院大学人文学会），**52**，56-72．

加藤　司（2007）．対人ストレス過程における対人ストレスコーピング　ナカニシヤ出版

諸井克英（1991）．改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討　静岡大学人文学部人文論集，**42**，23-51．

Radloff, L. S. (1977). The CES-D Scale: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement,* **1**, 385-401.

Russell, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. (1980). The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 472-480.

島　　悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘（1985）．新しい抑うつ性自己評価尺度について　精神医学，**27**，717-723．

谷口弘一（2007）．対人ストレスコーピング研究の再考　同志社心理，**54**，78-85．

谷口弘一（2013a）．対人ストレスコーピングの効果における個人差　長崎大学教育学部紀要：教育科学，**77**，51-57．

谷口弘一（2013b）．対人ストレスコーピングの効果における個人差―小・中・高校生を対象にして―　教育実践総合センター紀要，**12**，97-105．

谷口弘一・加藤　司（2007）．対人ストレスと対人ストレスコーピング　日本社会心理学会第48回大会発表論文集，496-497．

友野隆成・橋本　宰（2005）．改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み　パーソナリティ研究，**13**，220-230．

友野隆成・橋本　宰（2006）．対人場面におけるあいまいさへの非寛容と精神的健康の関連性について　心理学研究，**77**，253-260．